

# 想うがままに

## 私たちはどこからどこへ

本誌編集委員 小寺山康雄

### 本誌創刊と拙文への便り

本誌の創刊及び前号の拙文に対して、ありがたいことに十数人の読者から激励・感想を寄こしていただいた。中には大学卒業以来、音信が絶えていた友人が編集部で電話番号を訊いたのだろう、「懐かしいな。生きてたんや」と、電話をかけてきた人がいる。「生きてたんや」はこちらのセリフだと思いながら彼の住んでいるような田舎では、現在の流通事情からして本誌は入手し難いのではないかと、生きてたことを喜びながらも訝った。「ゲ

ンキハツラツ！」で編集部兼営業担当 兼原稿督促係の矢代君が、明治の「社会主義伝道隊」よろしく全国を行商しているのか、これは褒めてやらねばなるまいと思っていたら、女房が「アホ！今日きょうび本もインターネットで検索して買えるんや」と、ぼくのIT無知を嘲笑あざわらった。

的確な批評をしてくれたのは大学こそ違うが、同じ六〇年安保闘争世代で「生涯一新聞記者」を貫いた友人である。「貴兄のイタリアに対する温かい思いがしんみり伝わってくるエッ

セイです。日本の左翼組織はきわめて日本の風土が生んだ必然的結果であり、イタリア共産党はやはりイタリアという風土と文化、人間性が育んできたものと、あらためて感じました。そういう意味で『日本的』色彩が濃厚な日本を変えていくことには絶望する思いです。貴兄の文章を読んで、あらためて認識したわけで皮肉でした」。

また、イタリア旅行で知り合った人からは「尾崎ムゲンさんが亡くなったいたとは知らなかった。大変驚いています。尾崎さんの『戦後教育史年表』

は、教組運動をやってきた私にとつて座右の資料でした。学習会やオルグにフルに活用させていただきまし」と、便りを貰った。

ほくもあらためてムゲンの早逝を惜しむ。

### 実感する市民社会の分厚さ

そこで『ぼくがイタリア最前になった理由』の続きである。

イタリアを訪れるというよりも、最近では「帰ってきた」という感じなのだ、そのたびに思うことは、イタリアの市民社会の分厚さである。分厚いということは中立的概念であつて、右にとつても左にとつても分厚い。だからこそグラムシは政治社会がすべてである「東方」とちがつて、市民社会が堅固な陣地を構築している「西方」の革命はどうあるべきかを苦考したのだった。ファシズムは「金融資本の反動」や上からの反革命ではなく、市民

社会の只中から大衆運動として生まれ成功した「受動的革命」だった。だからこそファシズムとのヘゲモニー闘争に敗れ、自らも獄中に封印されたグラムシは知識人、大衆文学、民間伝承、党とそのヘゲモニーについて再考するのである。

グラムシは自分の眼でファシズム打倒を見ることなく獄中死したが、イタリアの市民はほぼ自力でファシズムからの解放を勝ち取った。あわせて戦後の国民投票で王制も廃止したのである。こうして労働者、市民は受動的存在から能動的行為者へと転生したのだ。

六〇年代にイタリア共産党内で活発に議論されたのは、この時期の革命の可能性について、その主体について、党のヘゲモニーについて、そしてグラムシ思想から何を継承するか等々であった。このときの論争は第二次「現代の理論」に紹介されているが、左翼民主

党への転換にあつたの論争とあわせて、現在でも私たちに大きな示唆を与えてくれると、ぼくは思う。

最盛期に比べると、かなり力は弱まったとはいえ、労働組合はそれを必要とする人びとにとつて最後の拠り所として依然健在である。協同組合もまだまだ強靱である。両者は働く人びとと生活者にとつて、対抗社会・文化として市民社会に深く根を張っている。そして、前号でも書いたように、広場やBARはテレビや新聞などメジャーな媒体よりも、ふつうの人びとにとつて情報を交換・発信しあう場として、日常的な交流の場として、イタリアの庶民には不可欠の空間なのだ。イタリアでは「市民的公共空間」の原初的形態は庶民の日常的営みのなかに見出すことができる。

イタリア発のPACE(平和)のレインボー旗は、今では世界的な反戦平和の共通の旗になっているが、プッシ

ユの第二次イラク侵攻の年、九三年夏に「帰った」とときには、フイレンツェなどはこの旗で街中が埋め尽くされていた。二〇〇万人のデモにも驚かされたが、集合住宅の窓という窓からP.A.C.Eの旗が垂れ下がっている光景に圧倒された。それから二年、今年二月にイタリアと南仏のカーニバル見物に出かけたが、ピアレッジョというトスカーナ州の小さな漁村の祭の演し物のフィナーレを飾ったのはP.A.C.Eの旗の乱舞であった。感激のあまり観覧席から飛び降りて、一緒に踊ってしまった。反戦平和はそれほど市民一人一人の意識に深く広く浸透しているのだ。

### 総括を、もつと総括を

『現代の理論』の復刊に対しては、多くの周辺では例外なく「この困難な時期に、よくぞやった」と激励してくれている。しかし同時に、これらの人が

ほぼ共通して言うことは、「難しい。いまひとつパンチが利いていない」という感想だ。「難しい。パンチが利いていない」は、同じことの裏表の表現ではないかと、ぼくは思う。

中岡哲郎さんは『現代の理論』の再刊にあたって、次のような苦言を呈している。「再刊運動に関連してこれまで受け取った文書の中に、敗北の原因を徹底的に検討して、その教訓とともに誌名を継承するという姿勢が見られないことに違和感を持ちます。……思想運動としての『現代の理論』の格闘と歴史には、現代の混沌に思想と理論によって切り込もうと志す人々に教訓となるものが数々あるはずです」。

また、安藤紀典さんはこう言っている。「今回の再刊・創刊は第二次とどういう関係にあるのか、説明が必要ですが……これは当面の説明責任というだけでなく、日本の現状がこうなっている

ことに對する自分たちの歴史的責任を抜きにして、『これから』を考へることできない、という問題にもつながります」(いずれも『創刊準備号』より)。

第二次『現代の理論』に深く関わった二人の苦言であるが、ぼくもまったく同感である。そのことは同じ『準備号』の座談会でも言った。

日本の左翼の悪弊のひとつに、総括不在もしくは不能がある。残念ながら構革派、『現代の理論』派もこの悪弊から免れていない。せっかく斬新な問題提起をしても、それが総括と結びついていないために、単なる思いつきとか、乗り移りとしか受け止められないことがしばしばであった。

その意味で、創刊号の住沢博紀論文は、社会民主主義との関連で「リベラル左翼」としての『現代の理論』派の総括を試み、『現代の理論』派が切り拓いた地平とその限界を論じている。ある友人などは「住沢論文は基調論文のよう

だ」と評するくらいである。住沢論文の内容については、これからおおいに議論されるべきだが、彼のような問題提起が多くの論者によって、もっと活発になされるべきである。

読者からの「難しい。パンチが利いていない」という批判は文体に対してよりも、読者の関心事に正面から向き合っていないからではないか。惨憺たる敗北の現実を前にして、第二次『現代の理論』時代からの読者は自分たちの闘いは何だったのか。自分たちが信じた理論と思想、そして運動のどこに敗北をもたらした要因があるのか、と悶々とした日を送ってき、現在も送っているにちがいない。

また、第三次『現代の理論』から読者になった若い人は「矮小化された議論ばかりが溢れかえり、『発展』や『進歩』を絶対化する筋肉質な言説（が横行しているが）、ギリギリのところまで自己と向きあう苦悩と懊悩、煩惱の結晶

としての『理論』を期待（筑波大学大学院生、『準備号』より）している。世代の差をこえて本誌に期待するものは同じなのだ。

### 豊穣の教訓「六八年革命」

総括のポイントはいくつかあるだろうが、ぼくは六〇年代後半の世界的な叛乱の総括がキーポイントになると思う。日本構革派は全国党派としてはこの叛乱の過程で消滅したが（この総括は別になされる必要がある）、世界的にはのちに「新しい社会運動」と呼ばれるようになるフェミニズムやエコロジズムは、この叛乱の継承として、あるいは反面教師として誕生した。また、六八年、チェコの「プラハの春」、フランスの「五月革命」、六九年、イタリアの「熱い秋」を通底したのは「直接民主主義」、「労働者自主管理」の思想の復権であった。さらに戦後平和と民主主義運動が取り残してきた被

差別部落や障害者問題、アジアに対する加害者責任の問題なども、この叛乱の中から一挙に噴出した。

叛乱という一挙的な運動の内部に、長期にわたる社会的・文化的構造の変革を必要とする諸問題が潜勢していたのである。しかし、叛乱の主体者は構革派も含めて、この潜勢力を引き出すことに失敗したばかりでなく、引き出すことの意義を自覚しなかった。欧州の運動との落差の一因はここにあるのではないだろうか。

一、二号の総特集は「日本どこからどこへ」であったが、第三次『現代の理論』が一貫して追求するべきテーマは「私たちはどこからどこへ」でなければならぬと考える。

こつらやま・やすお

一九四〇年神戸生まれ。神戸大学文学部卒。元兵庫県学連委員長。七七年～八八年、「社会主義と労働運動」誌編集長。市民の政治新聞「ACT」前編集長。「コラム「いずみ」」が好評。